

書評

井上 博・奥村 謙 編

EPS

臨床心臓電気生理検査(第2版)

関東中央病院名誉院長

杉 本 恒 明

『EPS臨床心臓電気生理検査第2版』を恵与いただいた。書評の依頼は勉強せよということである。喜んでお引き受けした。ところで、本書は改訂版である。第1版は2002年に上梓された。この5年間に何が、どのように変わったかがみられなければならない。まず、章建てについては、三次元マッピング法の章が加わっていた。CARTO法である。第1版でも章の中で触れられていたが、これが独立した章となった。全体に、執筆者は概ね、同じであるが、多くの章で、追加の記述がみられていた。当然ながら、文献は新しい。変更のない章も図表の配置が工夫されて、一変し、読みやすくなっていた。比べていて、第1版にあった編集者による「あとがき」がなくなっているのに気がついた。読み直すと、じつにいい文章である。捨てるには惜しい。そこで、この機会にその一部を再録させていただく。

「心臓電気生理検査は面白い。期外刺激で頻拍発作が再現され、刺激によって頻拍が停止する。それだけで興奮を覚えたものである。頻拍中に加えた刺激に対するさまざまな反応の機序を考えるの

は、パズルを解くのに似た知的作業である。未知の現象を見だし、その理屈を推測する。しかも最近は一アブレーションによりその推理の妥当性を証明できるようになった。これから臨床心臓電気生理検査を学ぼうとする若い人たちには、新知見を発見してみせるという気概を持っていただきたいと思う。検査をするだけで新知見が得られたのは過去のことである。何故か? もっとよい方法や指標はないのか? といった問題意識を持って検査に臨めば、新知見発見の醍醐味を味わえるかも知れない」

若かった時代のお二人の編集者の興奮と感動、そして意気込みが伝わってくるような文章である。こうした人々が育んできた問題意識が今日の電気生理学を確立し、ひいては本書の刊行に結実したともいえるのであろう。

本書はまず、電極カテーテルの解説から始まる。次がその血管内導入の手技である。心腔内のカテーテル位置を確認し、電位を記録する。電気刺激を入れる。この一連の操作によって、心臓あるいは不整脈の電気生理学的特性を調べることができる。この知識を基

礎として、洞不全症候群、房室ブロック、心室内伝導障害などの徐脈性不整脈、上室頻拍、副伝導路症候群、心房粗動、心房細動、心室頻拍、心室細動などの頻脈性不整脈の発生機転、QT延長症候群などの不整脈基質が明らかになる。この応用が、薬物の薬効評価、心停止蘇生例、神経調節性失神の鑑別診断である。次は治療である。徐脈性不整脈にはペースメーカーが用いられ、頻脈性不整脈に対しては、植え込み型除細動器、外科的手術治療、そしてカテーテル・アブレーションがある。すべてが電気生理学的ガイド下に行われる治療法である。

こうしてみると、今日、不整脈の研究、診断、治療の基本にはヒトにおける心臓電気生理検査があることを痛感する。本書はそのような検査の手技、理論、解釈を具体的に解説するばかりでなく、さらに次の展望までも示唆を与えてくれている。不整脈に関心を持ち、その診療を標榜する医師としては、熟読吟味して、内容を自家薬籠中におかれるべき指導書である。そして、それがあってこそ、一層、「心臓電気生理検査は面白い」。こうして検査の真骨頂に魅せられて、多くの不整脈専門医が育っていくことを、編集者も、評者も心から願っている。

〔B5 頁512 2007年 定価
13,650円(本体13,000円+税5%) 医学書院刊〕

* * *